

# 北野経王堂一切経（北野社一切経）の底本（二）

## ―高麗再雕版・思溪版以外の底本（1）―

佐々木 勇

（受理日二〇二〇年十月五日）

### ○、前稿の概要と本稿の目的・方法

#### 1. 前稿の概要

本稿の筆者は、応永十九年（一四二二）写本を主とする五〇四八帖の「北野経王堂一切経」（通称「北野社一切経」）について、以下のことを前稿で述べた。

『大般若波羅蜜多經』の底本について

1. 底本の中心は、高麗再雕版である。
  2. 応永十九年書写の『大般若波羅蜜多經』は、すべて高麗再雕版を底本としている。
  3. 巻第四六一に、高麗再雕版の版心が書写されている。
  4. 高麗再雕版の刻工名「世真」までも書写している。
- 『大般若波羅蜜多經』以外の底本について
5. 底本の中心は、宋版思溪版である。
  6. 開元寺版は、思溪版の欠を補うものとして利用された。

#### 2. 本稿の目的

前稿に記した先行研究および前稿によって、北野社一切経の主たる底本は、明確になった。

本稿は、前稿末に「高麗再雕版・思溪版以外の北野社一切経底本については、続稿で述べる。」とした、その続稿の一である。

『大般若波羅蜜多經』における高麗再雕版以外の底本と、『大般若波羅蜜多經』

以外において思溪版と開元寺版とがいかに活用されたかを述べることを目的とする。

高麗再雕版・思溪版以外の底本のすべてについては、紙幅の都合上、触れることができない。続きは、次号に掲載する。

なお、本稿も、大報恩寺（千本釈迦堂・現蔵の重要文化財「北野経王堂一切経」の原本調査なくしては、成しえなかった。閲覧に際し、御住職菊入諒如院下にご高配を賜った。本稿を起こすにあたり、これを明記して、心より御礼申し上げます。本稿は、全五〇四八帖の約三分の一を原本調査した範囲内で、北野社一切経の底本について判明したことがらを記すものである。

また、本一切経との比較のため、増上寺・知恩院・醍醐寺・東寺・岩屋寺（愛知県知多郡南知多町）・樹下神社（滋賀県大津市北小松）・瑞応寺（愛媛県新居浜市）・快友寺（山口県下関市）・海の見える杜美術館の原本を閲覧させていただき、東京大学図書館・龍谷大学図書館の公開画像を活用した。原本御所蔵の各寺院・所蔵機関御当局ならびに国際仏教学大学院大学日本古写経研究所・県・市教育委員会の皆様に、大変お世話になった。感謝申し上げます。

#### 3. 本稿の底本認定法

北野社一切経の底本について述べるに先立ち、本稿における底本認定法を記す。

北野社一切経において『大般若波羅蜜多經』の主たる底本とされた高麗版は、一行十四字を基本とする。

しかし、思溪版にも一行十四字の經典が有り、十八字を超えて彫られたものも存する。この点は、前稿に記した。

そのため、一行十四字であることのみを根拠に、高麗版が底本であるとすることはできない。

一方、宋版東禪寺版・開元寺版・思溪版は、一行十七字が基本である。一行の字数は同じであるものの、東禪寺版・開元寺版と思溪版とは、分巻法が異なる。

そして、東禪寺版・開元寺版が一函分の音釈をまとめた音釈帖を別帖とするのに対し、思溪版は各帖の巻末に音釈を彫る。だが、巻末音釈の有る東禪寺版・開元寺版も僅かながら存し、帖末音釈の無い思溪版も有るため、これも絶対的な判断基準にはならない。

さらに、東禪寺版・開元寺版には巻頭に題記が存し、思溪版にはそれが無いのも両者の相違点である。ただし、東禪寺版・開元寺版にも題記が無い帖が有る。

また、東禪寺版・開元寺版は各板の柱刻が装丁後も見える位置に彫られる。しかし、思溪版は紙継ぎによって板端の柱刻が隠れる。ところが、日本の写経は、底本の題記や柱刻が見えていても、通常は、写さない。

右のような次第で、いずれも決定的な判断基準ではない。

そのため、本稿では、右の諸観点を総合して底本を判定する。

それでもなお決めがたい場合は、底本とされた可能性が残る諸本の経本文を比較する。

## 一、北野社一切経『大般若波羅蜜多經』における高麗再雕版以外の底本

### 1. 和刻本

北野社一切経『大般若波羅蜜多經』には、『北野経王堂一切経目録』(一九八一年、文化庁文化財保護部美術工芸課。以下、単に『目録』と略称する)記載のとおり、一行十四字の高麗再雕版を写した諸巻中に、一行十七字で書写された巻が混じている。『目録』が記す「時代」ことにまとめて挙げる。

①巻第五〇・一・五〇四・五〇六・五六一・五六二・五六五(以上、『室町後』)。

『目録』記載のとおり、これら諸巻は、各行十七字で書写されている。

この六巻は、明応九年(一五〇〇)または翌文亀元年(一五〇一)の書写奥

書を持つ。

この中、巻第五〇・一・五〇四・五〇六・五六二には、明応九年の書写奥書の後、「十巻内料紙檀那宗清」「十巻内 宗清」「十巻内 宗清 又太良、」などの書き入れが存する。これによって、欠けていた十巻分の料紙を宗清らが喜捨し、それをを用いて明応九年に書写された諸巻であることが知られる。

これらの巻は、次のごとき版心記を写す(ただし、巻第五六五には無い)。

「六百内 四 巨」「六百 四(以上、巻第五〇四)」「六百 一 六 五」  
 「六百 一 六 十一」「六百 一 六 十三」「六百 一 六 十四」  
 「六百 一 六 八」「六百 一 六」「六百 六」(以上、巻第五〇六)、「六百 七 二 一」「六百 七 二 二」「六百 七 二 三」  
 等(以上、巻第五六二)。

古来、日本における『大般若経』写経は、十巻を一帙としたことが、正倉院文書の記事や藤原公任撰『大般若経字抄』、無窮会・天理大学・薬師寺各蔵『大般若経音義』等から知られる。

しかし、無窮会本『大般若経音義』上欄に別筆(朱筆)で「初百内」「二百内」等と書き込むように、十帙百巻をまとめることがいつから始まったのかは、判然としない。平安時代末までの『大般若経』写経には、右のような「六百内 四 巨」のごとき版心記は書写されない。

また、右の版心記は、宋版・元版や高麗版のように十巻一函を基本とする経函収納経のものでもない。

これらは、大般若経六百巻を、十巻が納まる経盆を置く棚十段が設けられた櫃に、百巻ずつを取めた経櫃収納経の版心記である。鎌倉時代以降に日本で彫られ、各地に印本が現存する『大般若波羅蜜多經』和刻本のそれである。現在報告されている中では、「春日版」「崇永版」「東福寺版」「五山版」と呼称されている『大般若波羅蜜多經』諸版本が、「六百 一 六 五」形式の版心記を持つ。それらは、一行十七字を基準とする。

たとえば、はじめの「六百内 四 巨」は、巻第五〇一から六〇〇までを取める櫃の(第一棚)四巻目(巻第五〇四)であることを示す。「巨」は、宋版と同じく、原則として十帖を一函に入れた、北野社一切経経函の千字文である。巻第五〇六の版心記「六百 一 六 五」は、より詳しく、六〇〇までを取める櫃の第一棚第六巻(巻第五〇六)の第五板であることを教えている。

右の版心記から、『大般若波羅蜜多經』巻第五〇一・五〇四・五〇六・五六一・

五六二は、和刻本『大般若波羅蜜多經』を底本とする、と推測される。同一書式で「明應九年 正月二十五日 覺藏坊有賀書写華」の奥書を持つ巻第五六五も、和刻本『大般若波羅蜜多經』を書写した可能性が高い。

②巻第五九三～五九八・六〇〇（以上、「江戸」）、五三七（『首五紙江戸補写』）、五九一・五九二（以上、「室町／江戸補写あり」）。

巻第五九三～五九八・六〇〇は、全巻江戸時代の補写にかかり、すべて一行十七字である。巻第六〇〇末に「征夷大將軍源綱吉公御修復」の元禄十四年（一七〇一）補修記がある。

巻第五三七は、『目録』が記すとおり、巻首五紙は、江戸時代の補写であり、それに、一行十四字の応永十九年書写経が継がれている。

また、巻第五九一は後半が、巻第五九二は第二紙以降が、江戸時代の補写である。両巻とも、巻首から一行十七字で書写されている。

右諸巻の経本文および改行位置は、宋版思溪版・開元寺版等とは一致せず、宋版の音釈も書写していない。

全巻が江戸時代の補写である巻第五九三を例として、諸本の対照結果を示す。まず、宋版東禪寺版・開元寺版・思溪版は、この巻第五九三本文を、一行の下に余白を残して改行することが無い。

これに対し、北野社一切経は、左のごとく改行する（本文所在は『大正新修大藏経』の巻数・頁数・段・行数で示す。以下同）。

07.1066a15: 『爾時世尊 07.1067a03: 『復次世尊 07.1067c14: 『爾時世尊  
07.1068a10: 『復次善勇猛 07.1068b02: 『復次善勇猛（以下、省略）

この改行の仕方は、現在比較できた諸本中、右に述べた和刻本（崇永版）あるいは春日版）と合致する。<sup>9)</sup>  
経本文対照結果の初めを示す。

大正蔵所在	北野社一切経	和刻本	高麗蔵	東禪寺版	開元寺版	思溪版
07.1066a01:	恭敬園纒	(同上)	恭敬園纒	恭敬園纒	(同上)	(同上)
07.1066a04:	小分深義	(同上)	少分深義	少分深義	(同上)	(同上)
07.1066b20:	無慚無愧	(同上)	無慚無愧	無慚無愧	(同上)	(同上)

この先も、北野社一切経と全同なのは、和刻本のみである。

以上、明応九年・翌文亀元年また江戸時代の補写に際して、崇永版・春日版

等と呼ばれる和刻本が底本に選ばれている。

## 2. 万暦版（嘉興蔵・徑山蔵）

③巻第二二七・二二九・二五八・四九一・四九六・四九七・五〇〇（以上、「江戸」）。

一行十七字の北野社一切経『大般若波羅蜜多經』に、また別の一群が有る。

右七巻のうち、巻第二二七・四九一は、『大日本史料』第七編之十六（一九五七年、東京大学史料編纂所）の北野社一切経奥書および『目録』にも記されている通り、明末・清初に江南地方で開版された万暦版の刊記（『前略』萬曆丙午孟冬月徑山寂照庵識）を奥書に写す。この二帖は、一行二十字の万暦版本文を、一行十七字で改行し、書写している。

巻第四九一は、万暦版の音釈を写す。一行十七字または十八字で書写をはじめのもの、第二紙の途中から、底本とした万暦版と同じく、一行二十字で写し、最終紙をまた一行十七字に戻す。この巻には、元禄十四年の書写奥書と補修記とが存す。

巻第四九六・四九七・五〇〇は、これも『大日本史料』『目録』に記される「金壇居士玉德施妻吳氏遺賢刻此（二行略）天啓甲子歲冬十二月金沙顧龍山識」の万暦版捨銭刊記を奥に写す。これによって、天啓甲子歲（一六二四年）に彫られた万暦版を底本とすることが知られる。巻第四九七は、最初と最後を一行十七字で、それ以外は底本万暦版の一行二十字のままに写している。巻第五〇〇には、万暦版の音釈も書写されている。その巻第五〇〇も、一行十七字の行が多いとはいえず、十五字・十六字の行が混じり、一行の字数は一定しない。

巻第二二九・二五八に奥書はないものの、巻頭で訳者を「唐三藏法師玄奘」としている点は、宋版ではなく、万暦版に一致する。しかし、一行の字数は、十七字前後に書き変えられている。

このように、元禄十四年（一七〇一）および同時期と推定される補写経には、一行二十字の万暦版を底本としながらも、一行十七字で書写しようとした努力の跡が見られる。

## 3. 黄檗版

『目録』は、『大般若波羅蜜多經』巻第五九九の一行字数「二十字（黄檗版写）」とし、黄檗版が底本であると判断している。

この巻第五九九には、「明和二歲次乙酉五月七日 常陸國真壁郡下妻町／天龍圓福寺二十二葉龍鑊」(原本の改行位置を／で示す。以下同じ)の奥書が存

する。確かに、北野社一切経『大般若波羅蜜多經』卷第五九九は、改行位置・音釈を含め、黄檗版と全同である。<sup>〔1〕</sup>

しかし、『大般若波羅蜜多經』卷第五九九は、黄檗版とその底本・万曆版とが、改行位置・音釈を含めて全同であるため、明和二年（一七六五）に万曆版を写した可能性を否定できない。

以上、本章では、北野社一切経『大般若波羅蜜多經』の底本について、左の二点を述べた。

A. 室町後期および江戸時代の補写経には、和刻本『大般若波羅蜜多經』を底本としたものが存する。

B. 元禄十四年頃の補写経には、万曆版（嘉興藏・径山藏）を底本とした巻も存する。

一行二十字の万曆版を写す際に、北野社一切経が『大般若波羅蜜多經』底本の中心とした高麗再雕版の一行十四字ではなく、日本古写経から古版本に引き継がれ、宋版・元版一切経でも行なわれた一行十七字の書式で写そうとしていることは、注目に値する。

## 二、北野社一切経『大般若波羅蜜多經』以外における底本

『大般若波羅蜜多經』以外の北野社一切経底本の中心は思溪版であり、開元寺版でその欠を補った巻が有ることを前稿で述べた。

本稿では、北野社一切経において思溪版を底本としたことが知られる特徴的な例を紹介すると共に、開元寺版を底本とした例を追加する。

### 〇. 思溪版

① 393守函『阿毘達磨俱舍論』卷第二十二、「十七字」・応永十九年写本。

『目録』には、「宋版刊記写」として、左の刊記が写されている。

比丘覺元刺血書此論一卷／上報四恩下資三有法界衆／生俱出苦輪齊成佛道 謹願

これは、思溪版の数少ない刊記の一つとして著名である。思溪版『阿毘達磨俱舍論』卷第二十一の巻末には、右の刊記が、全く同じ改行位置で彫られている。<sup>〔2〕</sup>

北野社一切経の本帖書写者了圓にとつても印象的な内容であったため、書写したものであろう。

② 393守函『阿毘達磨俱舍論』卷第二十二、「十七字」・応永十九年写本。

北野社一切経の『阿毘達磨俱舍論』卷第二十二帖末音釈は、「鬼（奴鈎切）嬰（奴鈎切）龜（居追切）」など、「○○切」型の反切である。これも、思溪版の当該帖末音釈三行を、行取り・改行位置もそのままに、書写したものである。

### 1. 開元寺版

以下は、「開元寺版を底本とした北野社一切経は、他にも存する。それらについては、続稿に記す。」と前稿で予告した内容にあたる。

① 161女『了本生死經・自誓三昧經』『貝多樹下思惟十二因緣經・緣起聖道經・稻芽經』以下本函七帖に、帖末音釈が存することも指摘する。指摘の通り、北野社一切経の本函七帖末には音釈が書写されている。『了本生死經・自誓三昧經』は、尾欠のため、帖末音釈が存したものが否か、不明である。

しかし、開元寺版の本函八帖の帖末に、音釈は無い。

では、開元寺版の題記を書写し、帖末音釈を持つ三帖の音釈は、開元寺版音釈帖の当該経音釈を切り出したものであろうか。

右三帖の帖末音釈と開元寺版女函音釈帖の音釈とを比較すると、一致しない部分がある。

また、『目録』は、『了本生死經・自誓三昧經』以外の、『貝多樹下思惟十二因緣經・緣起聖道經・稻芽經』以下本函七帖に、帖末音釈が存することも指摘する。指摘の通り、北野社一切経の本函七帖末には音釈が書写されている。『了本生死經・自誓三昧經』は、尾欠のため、帖末音釈が存したものが否か、不明である。

しかし、開元寺版の本函八帖の帖末に、音釈は無い。

では、開元寺版の題記を書写し、帖末音釈を持つ三帖の音釈は、開元寺版音釈帖の当該経音釈を切り出したものであろうか。

右三帖の帖末音釈と開元寺版女函音釈帖の音釈とを比較すると、一致しない部分がある。

大きな相違点は、経の配列順である。北野社一切経は、『作佛形像經』を第一帖とし、『曼殊室利呪藏中校量數珠功德經』を最終第八帖に置く。対して、開元寺版『女字函音釋』は、『諫王經』から始まり、『曼殊室利呪藏中校量數珠功德經』で終わる。東禅寺版女函音釈帖も、開元寺版と等しい。

また、開元寺版・東禅寺版の音釈は、第五帖巻頭『如來自誓三昧經』の音釈を第四帖末『自誓三昧經』に続けては掲げず、女函音釈帖の最後に記している。

これに対し、北野社一切経は、『如來自誓三昧經』の音釈を当該帖（第六帖）末に記入する。

さらに、開元寺版・東禅寺版は、『八吉祥經』に八行に亘る音釈を注す。一方、

思溪版は「不出字」として、『八吉祥経』に音釈を付さない。北野社一切経は、思溪版と同じく、『八吉祥経』音釈は「不出字」である。

音釈本文を比較しても、北野社一切経の誤写を除いて、完全に一致するのは思溪版の帖末音釈である。なお、北野社一切経は、思溪版の欠損字を別字に写している。<sup>14)</sup>

以上の諸点から、北野社一切経が思溪版の音釈を書写していることは疑いがない。

この事実が判明すると、開元寺版の題記を書した北野社一切経の四帖が、開元寺版と思溪版のどちらの経本文を写しているのが問題となる。

そこで、北野社一切経が思溪版音釈を写していることが明確な『八吉祥経』を含む『八陽神呪経・八吉祥経・八佛名號経・盂蘭盆経』<sup>15)</sup>について、北野社一切経と開元寺版および思溪版の経本文とを比較する。

大正蔵所在	北野社一切経	開元寺版	思溪版
14.0073b06:	靈鷲山中	(同上)	靈鷲山中
14.0073b11:	是二恒沙	(同上)	是過二恒沙
14.0073c23:	病疫痛者	(同上)	病疫疾痛者
14.0074a13:	我曾當共	(同上)	我曹當共
14.0074a15:	者令愈	(同上)	病者令愈

以下は、省略する。右のとおり、北野社一切経は、開元寺版の経本文を書写している。

開元寺版題記に続けて開元寺版本文を書写するものの、帖末音釈は思溪版のそれを書写した。

この実態から、応永十九年の一切経書写時に目指されたのは、思溪版の書写・奉納であったと考えられる。開元寺版は、底本の思溪版が欠けていた時に、思溪版を補うために使用されたのであろう。

② 219傳『彌勒菩薩所問經論』巻第二、「十七字」・応永十九年写本。

『彌勒菩薩所問經論』を、高麗再雕版は全九巻、思溪版と開元寺版は共に全六巻に調卷する。

そして、思溪版と開元寺版とは、本文と分巻位置とが異なる。

北野社一切経は、巻第一・巻第三・六は、底本の思溪版を帖末音釈を含めて写している。ただし、巻第四には、帖末音釈が無い。底本とした思溪版巻第四

に帖末音釈が無いためである。

しかし、北野社一切経『彌勒菩薩所問經論』巻第二は、本文と分巻位置とが、思溪版ではなく、開元寺版に一致する。帖末音釈は、無い。<sup>16)</sup>

もともと、東禪寺版の分巻位置と改行位置も、開元寺版に等しい。そのため、東禪寺版が底本である可能性も疑われる。だが、開元寺版と東禪寺版とは、『彌勒菩薩所問經論』巻第二全文中、左の一箇所が異なる。

26.028b14 開元寺版「是菩薩種」—東禪寺版「是菩提種」

北野社一切経の当該箇所は「是菩薩種」であり、開元寺版本文と一致する。

さらに、北野社一切経『彌勒菩薩所問經論』巻第二末には、巻末紙数「十七上尾」が書写されている。北野社一切経の一紙は四二cm程度と比較的短く、本巻は全二十六紙を使用している。よって、「十七」は、北野社一切経の紙数ではない。

この「十七上尾」は、開元寺版『彌勒菩薩所問經論』巻第二の巻末に記されている紙数である。通常は「止」で「紙」を代用し、「止尾」と彫られる。たとえば、開元寺版『彌勒菩薩所問經論』巻第四末には「十五昏尾」、巻第五末・第六末には「十六止尾」と彫られている。北野社一切経が依拠した開元寺版『彌勒菩薩所問經論』巻第二末では、板木に欠損が存したらしく、「止」が「上」にしか見えない。書陵部蔵開元寺版対応箇所にも、「十七上尾」と摺られている。<sup>17)</sup>

北野社一切経は、その開元寺版の姿をそのままに写している。なお、東禪寺版の同巻巻末紙数は、「拾柒止尾」である。

③ 187可『大方廣圓覺修多羅了義經』巻上・下、「十五字」・「室町」。

北野社一切経は、『大方廣圓覺修多羅了義經』を上下巻に分け、それを一帖にまとめる。

思溪版・東禪寺版は、『大方廣圓覺修多羅了義經』を上下巻に分けない。本経を上下巻に二分するのは、開元寺版である。

北野社一切経は、本経上巻は一行十五字で、下巻は一行十七字で書写している。『目錄』が「十五字」とするのは、上巻部分を指す。この上巻の底本については、続稿で述べる。

下巻の帖末には、「校畢（梵字）（覺忍）（花押）／願以此結縁 生、如説行／二利不退轉 全正法久住 空等（花押）」の書写奥書がある。書写者「空等」の名は、応永十九年書写巻、応永二十年転説諸巻の奥書にも見られる。

巻下本文は、北野社一切経底本の中心をなす思溪版とは合わず、開元寺版と一致する。

また、北野社一切経「開元寺版」編「冰」「脩」「昔」―思溪版「遍」「水」「修」「替」等の本文字体の異同、および行取りの異同も有る。北野社一切経は、開元寺版に等しい。

北野社一切経「大方廣圓覺修多羅了義經」の卷下は、開元寺版を底本とする。  
④ 373造「阿毘達磨大毘婆沙論」卷第十二、「十七字」・「室町」。

『目録』に、「宋版捨錢刊記寫」二行ありの指摘が有る。

北野社一切経原本の奥は、左のとおりである。

十四尾李保

閩崇賢里石修職郎潘欽誼施財雕造斯經一函流通／聖教薦嚴  
亡考運使學士五郎妣宜人方氏十二娘願往生界者

右は、開元寺版当該帖末同位置の捨錢刊記である。<sup>18)</sup>

経本文も、誤写を除き、開元寺版と一致する。

また、「十四尾李保」は、開元寺版の紙数と刻工名とを書写したものである。

開元寺版は、『阿毘達磨大毘婆沙論』卷第十二を「十四」板で彫っている。

これに対し、北野社一切経は、『阿毘達磨大毘婆沙論』卷第十二の書写に、

二十一紙を要している。開元寺版は一紙70cm弱、北野社一切経は一紙40cm強のため、紙数のずれが生じる。

実際の紙数とは異なる開元寺版の紙数と刻工名とを、北野社一切経は写している。

⑤ 257臨「大乘法界無差別論・提婆菩薩破楞伽經中外道小乘四宗論・提婆菩薩釋楞伽經中外道小乘涅槃論」、「十七字」・「江戸」。

本帖は、「元和五（己未）二月吉日」（〽）内は割書である。割書の改行を示すことは略する。以下同）の奥書を持つ。

この帖は、「臨 八卷 一」「臨 八卷 二」形式の版心記を持つ。よって、

底本は思溪版とは異なる。思溪版に存する帖末音釈も無い。

この版心記は、東禪寺版・磧砂版・普寧寺版のそれとは異なり、開元寺版の

版心記と一致する。

しかし、本帖の版心記の位置は、開元寺版と異なる。

開元寺版本帖は、全十三板であるのに対し、北野社一切経の本帖版心記は、

「二十」板まで有る。本帖の版心記は、開元寺版の柱刻書式で、一紙が短い北野

社一切経の紙数を記している。希な例である。

経本文の比較からも、本帖の底本が開元寺版であることが知られる。諸版経

本文との比較結果の一部を示す。

大正蔵所在	北野社一切経	開元寺版	東禪寺版	思溪版
31.0892b15:	所依寶處因	(同上)	(同上)	所依寶處如
31.0892b24:	善法得安故	(同上)	(同上)	善法得安立故
31.0892c25:	斷常皆悉難	(同上)	斷常皆悉離	(同上)
31.0894a12:	恒河沙	(同上)	(同上)	恒何沙
31.0894a17:	無有差別	(同上)	(同上)	無言嗟別

⑥ 257臨「廻諍論」、「十七字」・「江戸」。

『目録』に「版心写」とあるとおり、本巻は、多くの版心記を写す。まず、それを、

紙数順に抜き出す（第二紙以降のすべてに写されている「臨 一卷」は省く）。

一 程亨、二、三、四、五 郭正、六、七 吳□、八 吳浦、九 鄭文、十 武、

十一 王景、十二 保、十三、十四 李昌、十五、十六 陳陸、十八、十九

蔡大、二十 介、二十一 李廣、二十二。

右は、開元寺版「廻諍論」の柱刻と一致する。ただし、開元寺版柱刻のすべ

てを写しているのではない。<sup>19)</sup>

なお、開元寺版第二板の柱刻五行後下方に彫られた刻工名「王仕」を、北野

社一切経は写す。

また、北野社一切経は、巻末紙数「二十三尾」と刻工名「先」をも写す。さらに、

その下に、「敏造」が写されている。この「敏造」は、「林敏造」の「林」を書写

しなかった例であろう。「林敏」は、開元寺版の印工である。<sup>20)</sup>

⑦ 257臨「止觀門論頌・手杖論」、「十七字」・「江戸」。

本帖巻末には、開元寺版当該帖の刻工名「八昏尾高元」が、そのまま書写さ

れている。思溪版本帖に存する帖末音釈も無い。本帖は、開元寺版を写している。

⑧ ⑥⑦は、いずれも257臨函であった。

しかし、257臨函収納経でも、応永十九年に書写された「十二因縁論・壹輪盧

迦論・大乘百法明門論」および「百字論・解拳論・掌中論」は、思溪版経本文

を書写し、思溪版の帖末音釈をも書写している。

この257臨函についても、江戸時代の補写にあたって、底本とすべき思溪版が

用意できなかったため、代用として開元寺版が用いられた、と考えられる。

## 三、結び

これまでの検討の結果、次のことが判明した。

北野社一切経の『大般若波羅蜜多経』は、

1. 高麗再雕版を底本の中心とする。（前稿）
2. 室町後期および江戸時代の補写経には、和刻本『大般若波羅蜜多経』を底本としたものが存する。（本稿）
3. 元禄十四年頃の補写経には、万暦版（嘉興蔵／径山蔵）を底本とした巻も存する。（本稿）

北野社一切経の『大般若波羅蜜多経』以外は、

4. 宋版一切経「思溪版」を底本の中心とする。（前稿）
5. 宋版一切経「開元寺版」を底本とするものもある。（前稿・本稿）

以上の結果を導く作業の中で、次のことが知られた。

『大般若波羅蜜多経』は高麗再雕版を、『大般若波羅蜜多経』以外は思溪版を底本とすることが北野社一切経書写事業当初の計画であり、和刻本・万暦版・開元寺版は、高麗再雕版および思溪版の欠を補うものでしかなかった。

その補写は、日本古写版経・宋版と同じ、一行十七字で実行しようとした。

## 【注】

- (1) 佐々木勇「北野経王堂一切経（北野社一切経）の底本（一）―主たる底本―」（広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部 文化教育開発関連領域）第68号、二〇一九年十二月。
- (2) 馬場久幸「北野社一切経の底本とその伝来についての考察」（佛教学術総合研究所紀要 二〇一三年三月）は、『北野経王堂一切経目録』で「一行十四字語である」ことを根拠に、左の諸経は、高麗版大蔵経が底本であるとした。  
087衣『離垢施女経』（一帖）、187可『大方広円覚修多羅了義経』（上下巻・一帖）、539曲『廣釋菩提心論』（四巻・二帖）、『仏説如幻三摩地無量印法門経（上中下巻・二帖）』、『一切秘密最上名義大教王義軌（一帖）』、『一字頂輪王念誦儀軌』、『瑜伽蓮華部念誦法』（以上二巻一帖）、『甘露軍荼利菩薩供養念誦成就儀軌』（一帖）、『観自在多羅瑜伽念誦法』、『聖観自在菩薩心眞言瑜伽觀行儀軌』（以上二巻一帖）、『仏説蟻喻経』、『金剛壽命陀羅尼

念誦法』、『観自在菩薩如意輪念誦儀軌』（馬場論文では落ちている）（以上三巻・一帖）、『一字頂輪王瑜伽觀行儀軌』、『大虚空蔵菩薩念誦法』、『仁王般若念誦法』（以上三巻一帖）。

この馬場論文は、ほぼそのまま、馬場久幸「日韓交流と高麗版大蔵経」（二〇一六年、法蔵館）第二章第二節に所収された。

しかし、曲函の諸経は、大報恩寺蔵の原本では、すべて一行十七字で書写されている。『北野経王堂一切経目録』の記載は、誤っている。馬場論文も記すとおり、曲函十帖の千字文函号および経本文は、思溪版と一致し、高麗版とは一致しない。北野社一切経曲函の諸経は、思溪版を底本としている。

(3) 白井信義「北野社一切経と経王堂 ―一切経会と万部経会―」（『日本仏教』三号、一九五九年三月）は、これを根拠に、北野社一切経の底本が「宋板湖州本」（思溪版）であることを明らかにした。

(4) 『北野経王堂一切経目録』は、巻第十一・二五二―二五七・三三九・五三八（以上「室町」）も一行「十七字」とする。しかし、実際には一行十四字で書写されていることは、前稿に述べた。

(5) 以下、前稿同様、経巻名の下に「目録」が記す一行字数と書写の時代とを、「1」と「1」内に記す。ただし、この経のように一行十七字であることを先に記した場合は、「目録」の字数を省略する。

(6) たとえば「奉請大般若経五十六帙（无四帙 第四十帙欠三卷）」（統々修「天平十一年四月卅日」）などの記事が残る。

(7) 西大寺蔵「大般若経音義」永仁六年（一二九八）写本・京都大学文学研究科図書館蔵「経字引」（言語学）貴重）南北朝期写本・古梓堂文庫旧蔵大東急記念文庫蔵「大般若経音義」室町初期写本・木曾定勝寺蔵「大般若経音義」明和四年・五年（一四九五・一四九六）写本等に、この「初百内」の書き込みは引き継がれている。築島裕「大般若経音義諸本小考」（『東京大学教養学部人文科学科紀要』21、一九六〇年三月）、同「大般若経音義の研究」（本文篇・一九七七年八月、索引篇・一九八三年十月、勉誠社）、西崎亨「西大寺蔵本『大般若経音義』について 研究と和訓纂」（『武庫川国文』37、一九九一年三月。後、西崎亨「訓点資料の基礎的研究」（一九九九年、思文閣出版）に収載）、山田健三「木曾定勝寺蔵大般若経音義について」（『信州大学 内陸文化研究』四号、二〇〇五年二月）、参照。

(8) 川瀬一馬「樹下神社蔵佐々木宗永開版の大般若経 ―附、同蔵春日版五部

- 大乘経ほか」(「かがみ」20、一九七六年三月)、同「安土町正禪寺藏佐々木崇永開版の大般若経について」(「かがみ」22、一九七八年五月)、藤田励夫「崇永版」大般若波羅蜜多経の研究」(「仏教芸術」276、二〇〇四年九月)、同「南北朝・室町時代の版本大般若波羅蜜多経に関する研究——いわゆる「崇永版」と「東福寺版」を中心に」(「Museum」660、二〇一六年二月)、山本信吉『古典籍が語る——書物の文化史——』(二〇〇四年、八木書店) 226頁、佐々木勇「春日版『五部大乘経』の底本とされた宋版一切経(一) 刻記の比較による検討」(「広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部 文化教育開発関連領域」64、二〇一五年十二月)、等参照。「春日版」「崇永版」「東福寺版」「五山版」が独立した別版であったかどうかは、今後の課題である。藤田論文では、「崇永版」と「東福寺版」とに同一版が有ることが具体的に指摘されている。
- (9) 樹下神社蔵本の本文と比較した。
- (10) 本稿では、追認可能であることを優先し、万暦版は、東京大学総合図書館所蔵万暦版大蔵経(嘉興蔵/径山蔵) デジタル版および龍谷大学図書館貴重資料画像データベースに依拠する。
- (11) 北野社一切経を収めていた京都北野天満宮の輪蔵を伝存する愛媛県新居浜市瑞応寺蔵の黄檗版『大般若波羅蜜多経』と比較した。黄檗版閲覧に際し、お世話くださった瑞応寺御当局に御礼申し上げます。
- (12) 初印本と言われる岐阜県長滝寺蔵思溪版にも、これと同一文・同一書式の刊記が存する。なお、思溪版と分函が異なる開元寺版・東禪寺版は、『阿毘達磨俱舍論』巻第二十一を、396満函に収載する。
- (13) 思溪版音釈の反切は、「○○反」を主としつつも、「○○切」形式を混じている。その由来および音注の内容検討等、すべて今後の課題として残されている。
- (14) 北野社一切経は、「芳」の思溪版下部欠損字を「共」とし、「尹」の思溪版右部欠損字を「手」と写している。
- (15) 北野社一切経の誤写・誤脱による異同であることが明らかなのは、省略する。以下、同じ。
- (16) 『目錄』には、『彌勒菩薩所問經論』巻第二・四にも音釈が有ることになっている。誤りである。
- (17) ただし、知恩院蔵本は板木に欠損が生じていない段階の印らしく、「十七止尾」である。
- (18) ただし、開元寺版は、「十六娘」である。北野社一切経は、詰めて彫ってある開元寺版の「六」を「二」と判読・書写したものである。
- (19) 開元寺版には、「四 鍾才」「七 呉」「十七 王大」等とある。
- (20) 野沢佳美「宋・福州版大蔵経の印工について」(「立正大学東洋史論集」20、二〇一九年三月)、『醍醐寺藏宋版一切経目錄』(二〇一五年、汲古書院) 大般若波羅蜜多経巻第一三一・一三二・一三三、等、参照。

The Original Text of the Buddhist Canon from Kitanokyōdō hall (北野経王堂一切経) (2)  
— About the not main original text (1) —

Isamu Sasaki

Abstract: The Buddhist Canon from Kitanokyōdō hall (北野経王堂一切経) were written in 1412. The purpose of this paper is to clarify those original texts.

The following points were mentioned in the previous paper and this paper.

1. Most of the original text of Dai-Hannya-kyō (大般若経) is the Korai saichouhan (高麗再雕版).
2. There are copy's of Japanese editions in Dai-Hannya-kyō (大般若経).
3. There are also copy's of the Banreki-ban (万暦版) in Dai-Hannya-kyō (大般若経).
4. Most of the original text of besides the Dai-Hannya-kyō (大般若経) is the Song-dynasty Sixi Edition of the Buddhist Canon (宋版一切経思溪版).
5. When there was not the Song-dynasty Sixi Edition of the Buddhist Canon (宋版一切経思溪版), Kaiyuan temple Edition of the Buddhist Canon (宋版一切経開元寺版) was used secondarily.

Key words: the Buddhist Canon from Kitanokyōdō hall, the Korai Edition of the Buddhist Canon, the Song-dynasty Sixi Edition of the Buddhist Canon, the Song-dynasty Kaiyuan temple Edition of the Buddhist Canon

キーワード: 北野経王堂一切経, 高麗一切経再雕版, 宋版一切経思溪版, 宋版一切経開元寺版